

研究者の業績情報における自動収集の効果の測定と評価

福島直人

近年、人間の負担を減らすことを目的にして情報システムの開発が盛んに行われている。本研究では、TRIOS (Tsukuba Researcher Information Online System) という筑波大学の研究者情報システムに着目した。このシステムは筑波大学の研究者の業績情報を自動収集するものである。関連した研究としては、小野ら(2007)による九州大学内で生産された論文などの知的生産物を収集・蓄積・保存しインターネットを通じて学内外に無償で配布するシステムである QIR (九州大学学術情報リポジトリ) と学内研究者の基本情報から教育・研究・社会活動をインターネット上で公開するシステムである九州大学研究者情報の連携について述べられたものがあげられる。しかし、この研究では連携による効果までは測定されていない。

研究業績登録にあたっての研究者の負担を軽減することを目的として導入された TRIOS が研究者にとってどういった効果を発揮しているのかを明らかにすることが本研究の目的である。具体的には、研究業績登録の際に自動収集された研究データとすべて手入力された研究データの比率などを明らかにしていく。研究業績登録の際に自動収集されている研究データは、研究者の負担を大幅に軽減していると考えられる。

本研究では、10 の系 (システム情報系・ビジネスサイエンス系・医学医療系・芸術系・人間系・人文社会系・図書館情報メディア系・数理物質系・生命環境系・体育系) と 4 の所属機関 (計算科学研究センター・国際統合睡眠医科学研究機構・生命領域学際研究センター・本部等) の TRIOS のデータ 26851 件を分析対象とした。期間は、出版年月日が 2013 年 10 月 1 日から 2016 年 9 月 30 日までの 3 年分とした。なお、データの集計には SPSS を使用した。

言語、系、査読、業績詳細種別における自動収集の割合や登録状況、本来自動収集できるはずの研究データなどが結果として得られた。数理物質系などの理系の英語論文で、なおかつ学術雑誌である研究データは自動収集の割合が高かった。現状自動収集されている研究データは 30.3%であったが、本来自動収集できる研究データは 46.8%であることがわかった。これは、TRIOS でのシステム処理が遅いことや処理してから登録までに時間がかかることが原因であると考えられる。

(指導教員 歳森敦)